

『大鏡』「大宅世次（世継）」名称考

森 下 純 昭

はじめに

『大鏡』の語りは三人の人物で構成されている。語りの中心人物は一九〇（流布本系一五〇）歳の「大宅世次（世継）」で、相方が一七〇（流布本系一三〇）歳過ぎの夏山重木（繁樹）、熱心な聞き手が三〇歳ほどの無名の侍である。この内、夏山重木（繁樹）は、その名前の由来が元服の際に主人藤原忠平によつて五月生まれに関連づけて「重木（繁樹）」と命名されたことが紹介されている。この名称の持つ意味は、藤原忠平が名付け親であることと『大鏡』の内容に照らして、「藤原北家」の繁栄に繋がる名称であることが理解されるが、「語り」の中心人物である大宅世次（世継）は

主はその御時の母後の宮の御方の召使、高名の「大宅世次」とぞ言ひ侍りしかな。

（使用本文は日本古典文学大系『大鏡』。

底本は東松了忝本・六巻）

と、重木の説明で「高名の「大宅世次」と紹介されるものの、この「高名な」が読者の質問を封じて説明無用としているため、これがどのような意味を含む呼称であるのか説明もされないで、読者にとっては判然としないがそのまま受け入れるしかない。『大鏡』の序文に出る重要事項（語彙）は、『大鏡』全体に関わる内容を含むと見られることから、この「大宅世次（世継）」の呼称も何らかの『大鏡』全体に関わる名称であるが、これまでは作品全体の内容特性との関わりでは十分に検討されてきてはいないようである。よつてこの名

称をめぐって、ここにいささかの検討を行いたい¹⁾。

一 諸注釈書の「大宅世次（世継）」説明

まずこれまでの注釈書の説明（頭注・語釈）を列記するところから始めたい（年代順）。

王代撰関の次第を詳に知たる翁なれば、公の世統といふならん。此物語がたりの作名なり。（大鏡短観抄 大石千引 日本文學古註大成 国文名著刊行会 昭和九年九月二〇日）

この物語を主として話されたる翁の名にて、もとより仮託の人物なり。さて思ふに、大宅は、公の意味にて、朝廷の事を寄せ、世継は、御世の継々の意にて、御歴代の事なり。されば、朝家の歴史といふほどの義にて、この翁の話らるゝこと、やがて、王朝の歴史なれば、しか名付けたるならん。かくて今一人の翁を、夏山の繁樹といへるも、この者、五月に生れたるに因み、さて夏山に繁りさかゆる藤浪の花を、藤原氏の栄華に思ひよそへて、名づけたりともしふべきか。（大鏡詳解 佐藤 球 明

治書院 昭和十二年六月一日）

この物語の中心の話し手に名付けた仮託の名（補注）大宅は公、世次（世継）は世々を次々（継々）に語ること。従つて大宅世継は朝廷の系譜を骨子として宮廷貴族の歴史を物語る翁の意味で命名されたものである。因みに当時「世次」（世継）は仮名文の歴史の総名として用いられていたようである。（日本古典文学大系 松村博司 大鏡 一九六〇年九月五日 岩波書店）

「大宅」という氏は実在するが、ここでは、公（朝廷）の意で、「公の代々の歴史」の意味をこめている。（日本古典文学全集 大鏡 橘健二 昭和四九年十二月二〇日 小学館）

「大宅」は真の姓ではなく、代々の公向きの歴史の意を匂わし、「世次」は、それを相継いで語るという意を匂わして、作者の意図が負わされている。（大鏡全評 上巻 保坂弘司 昭和五四年一〇月二〇日 學燈社）

「大宅」は公で、天皇・皇室もしくは朝廷をさし、「世継」は世代継承で系譜の義 但し、この姓名は本名ではなく、

世間でそう呼んだ通名・綽名であろう。(新潮日本古典集成 大鏡 石川徹 新潮社 平成元年六月二十五日)
 「大宅」姓は実在したもののだが、ここは「公おほやけ」(朝廷)を表し、「世次(継)」の名とともに「公の代々の歴史」の意味をこめた。これから歴史語りをする中心人物。(新編日本古典文学全集 大鏡 橘健二・加藤静子 一九九六年六月二〇日 小学館)
 大宅は、天皇や皇室をさす。世継とは、世代継承で、系譜の意味。代々の系譜を語り継ぐ人で、あだ名である。
 (大鏡全注釈 河北 騰 平成二〇年一〇月一〇日 明治書院)

これらの説明はほぼ同じ内容で、「朝廷の代々の歴史を語る人物の呼称」の意味で解釈する(他の「大鏡」関係書も略同じ)。但し、「大鏡」で語られる内容が藤原北家の歴史であることを考慮して、「帝の歴史」のみならず「宮廷貴族の歴史」の意味に重なる解釈もなされている。これらを通覧するに、早くの注釈書には、「大鏡」の中心的内容が藤原北家の歴史であることと、語りの中心人物の姓「大宅」が繋がりに

くいことに戸惑いがあるように感じられるが、近時の注釈書はその戸惑いから脱して「公」帝」の系譜、あるいはいささか曖昧な形で「代々の歴史」の意味で説明されている。しかしながら、「おほやけ」帝」の意味あるいは「代々の歴史」の意味では「大鏡」序文の主旨とは矛盾を来すのではなからうか。序文及び大臣列伝序文(後一条帝紀末)では世次(世継)は次のように語る。

まめやかに世次が申さむと思ふ事は、こと事かは。ただ今の入道殿下の御有様の、世にすぐれておはします事を、道俗男女のお前にて申さむと思ふが、いと事多くなりて、あまたの帝王・后、また、大臣・公卿の御上を続くべきなり。(序文)

帝王の御次第は、申さでもありぬべけれど、入道殿下の御栄華も何により開けたまふぞと思へば、まづ、帝・后の御有様を申すなり。(後一条帝紀)

このように、世次(世継)は道長の栄華のよって来たる所以を語るのが目的で、「帝王の代々の歴史」を語るのが目的ではないと明言している⁽²⁾。従って、「大宅」の意味は「公」の意味とは別様に考えなければならぬのだろう。

二 「おほやけ」の用例・用法、

藤原氏と大宅氏

次に『大鏡』中の「おほやけ」の語の使用実態を見ていきたい。(以下、用例検索は秋葉安太郎『大鏡の研究 上巻 本文篇』に拠る。)

「おおやけ」の用例(『大鏡』)

- ・道真左遷記事(時平伝) 幼くおはしける男君女君したひ泣きておはしければ、小さはあえなんとおほやけもゆるさせ給ひしぞかし。(醍醐天皇)
- ・時平伝 ただ今の北野宮と申してあら人神におはしますめれば、おほやけも行幸せしめ給ふ。(醍醐天皇)
- ・忠平伝 おほやけの勅宣うけたまはりて定めに参る人となふるは何者ぞ。(帝王)
- ・師輔伝 地下などおぼしめしはばからせ給ふまじ、行く末にもおほやけに何事もつかふまつらんにたへたる者になん。(藤原行成を源俊賢が一条帝に推挙)
- ・道隆伝 おほやけ(藤原隆家を) 大臣大納言にもなさ

せ給ひぬべかりしかど、(一条天皇)

これらの他、「おほやけ物 三条院」(三条帝紀)「おほやけ事」(師尹伝)、「おほやけ様の公事作法」(道長伝)など天皇個人を指さない用例もあるが、大方は「帝王」を指すことが多い。これら用例の実態からしても「おほ(お)やけのよつぎ」を「公(帝王)の系譜」と理解するのは、「帝紀」に一巻しか当てていない『大鏡』の実態とも齟齬を来す。

因みに、語り手「大宅世次(世継)」は一九〇(一五〇)歳の超老人で所謂「翁語り」である。翁語りの「古老」は、古くは「問ふ国郡旧事、古老答曰」(『常陸国風土記』)、「古老伝云」等、この「古老」は記憶力に優れた語部のことではなくそれぞれの土地の古い言い伝えそのものをさすようであるが、⁽³⁾これが語り部である場合でも無名であることが多い。中で語り手の名を記すのは、記憶力に優れた語り部としては『古事記』の「稗田阿礼」が名高い。『古事記』は平安時代にあつては「秘書」扱いされている(『明衡往来』)が、日本紀講の講義録日本紀私記には古語の用例根拠として『古事記』が度々引用されている。確かな繋がりとは認定し難いが、『六国史』からの連続を意識しているらしい編年体記述の『栄花

物語」に対して、紀伝体を採用している『大鏡』は、多くの先学が指摘するように記述者とは別に「語り手」を具体的に設定する紀伝体の『古事記』のスタイルを継承して、語り手にある意図をもって「大宅世次」という具体的な名前を付けることにしたのであろう。

以上、『大鏡』の作品内の具体的な記述からは、語り手の「氏(姓)」が何故「大宅」とされたのかは明らかにし難く、また「語りの現在時万寿二年」当時、藤原道長の高野詣に随従した右衛門権少尉大宅高平(『御堂関白記』治安三年(一〇二三)、万寿元年(一〇二四)右大史、翌年左大史となり政務に活躍した大宅恒則(『小右記』治安三年四月二十三日・『官史補任』)等、藤原氏と関わりありそうな人物はいるものの(阿部猛『日本古代史人名辞典』東京堂出版)、『大宅氏』が平安時代中期に藤原氏とどのように密接特別な関係にあったかを知るのも史料的には難しい。そこで、上代まで遡って「大宅氏」が地域的に藤原氏とどう関わるのか次に検討したい。

三 「大宅氏」と「山科」と「藤原鎌足」

平安時代初中期の『延喜式』や『倭名類聚抄』には山城国宇治郡山科郷に地名の「大宅」や氏名「大宅」を見いだすことはできないが、先学によって『新撰姓氏録』にその氏名のあることが指摘されている。ここでは、『新撰姓氏録』の研究考證篇 第二(佐伯有清 吉川弘文館 昭五十七)に拠り「藤原氏」と関係ある部分を引用することにする。

【一八六 一九〇】大宅。小野朝臣と同じき祖。

大宅 大宅の氏名は、後の大和国添上郡大宅郷(奈良市古市町付近)の地名にもとづく。本条の大宅氏は山城国宇治郡山科郷大宅(京都市東山区山科大宅)の地を本拠としていた。また山城国紀伊郡にも大宅氏は居住していた。

右書に拠れば、大宅氏の一族には宇治郡山科郷の人として大宅豊宗(康保元年十二月十三日付「醍醐寺牒案」『平安遺文』一四一〇)以下、上代から平安時代にかけての多くの人名が掲げられている。

現在も地名の残る京都市山科区大宅は、上代から平安時代にかけて「大宅氏」の本拠の一つであったことが知られる。また『大日本地名辞書』は山科（大宅）と中臣（藤原）鎌足との繋がりを次のごとく紹介する。

山階寺址 藤原の祖中臣鎌足創建し、其子不比等之を大和国に移し厩坂寺又興福寺と曰、実に藤原氏の氏寺たり、名勝志に、旧跡山科柳辻村三宮明神辺とも又小野村に興福寺橋の字存すとも云ふ。柳辻は大宅の西にて、小野は其南とす、今山科村大字東野の三宮森は即陶原家址なりと説くものなり。

帝王編年記云、斉明天皇三年、内臣中臣連（宇治臣鎌足）於山階陶原家、始立精舎、及設齋会、是維摩会之濫觴也。盛衰記云、興福寺は、是淡海公（藤原不比等）の御願、藤氏累代の氏寺なり。此寺はもと天智天皇即位八年、嫡室鏡女王、大織冠（鎌足）の御為に宇治郡山階の郡に建てられる。

『平安京提要』（角田文衛編 角川文芸出版 平成九年）では「大宅廃寺」について、推定寺域は、京都市山科区大宅山田・鳥井脇町・奥山田にあたり、創建は白鳳時代

と考えられる。大宅氏の氏寺「大宅寺」とする説や中臣鎌足の「山階寺」とする説があるが、現時点では裏づける史料がなく結論は出されていない。

と紹介する。

これらは諸種の史料や発掘史料をもとにしたの解説紹介であるが、一様に「宇治郡山科郷」に「大宅氏」の本拠（の一つ）があつたことを認定しており、またこの宇治郡山科郷に中臣（藤原）鎌足の居所「陶原家」があつたことも認定している。このことは、藤原氏の始祖である「中臣（藤原）鎌足」と「大宅氏」は地域的に連接していることを認定していることになる。⁴⁾

右の諸解説は、『大鏡』外の史料に基づいての「大宅」と「藤原鎌足」との繋がりを説明するものであるが、この関係が『大鏡』の作品内容と矛盾を来さないか次に検討する。

四 「大宅世次（世継）」は

「藤原世次（世継）」の韜晦か

『大鏡』の 大臣列伝序文（「後一条帝紀」巻末）には次

の如くある。

流れを汲みて、源を尋ねてこそは、よく侍るべきを、大織冠より始め奉りて申すけれど、それは余りあがりて、この聴かせたまはむ人々も、あなづり事には侍れど、何事ともおぼさざらむものから、言多くて、講師おはしなば、事醒め侍りなば口惜し。されば、帝王の御事も文徳の御時より申して侍れば、その帝の御祖父の、鎌足のおとどより第六にあたりたまふ、世の人藤左子とこそ申すめれ、その冬嗣の大臣より申し侍らむ。

ここで語り手大宅世次（世継）は、大織冠鎌足より語り始めるべきだが聞き手にはあまりにも耳遠く、かつ講師登場までの時間も気になる、だから平安時代藤原北家の始祖冬嗣から語ろうとの言い方である。これは同時に「大宅世次（世継）」が「藤原氏」の始まり（源）を史実通りに鎌足に置いていることを明確に示す。そしてまた、このもの言いには、まず冬嗣から道長までの藤原氏（北家）の歴史を語ることにするが、（時間的）余裕があれば藤原氏始祖である大織冠鎌足からの歴史も語るとの含みを残している。「大宅世次（世継）」の語ろうとする対象は、前掲の「帝王の御次第は、申さでもあり

ぬべけれど、入道殿下の御栄華も何により開けたまふぞと思へば、まづ、帝・後の御有様を申すなり」と併せ考えれば、語りの中心内容は「帝王の歴史」ではなく、大織冠鎌足に始まる道長までの「藤原氏」の世次（系譜）ということである。この藤原氏の歴史を、では何故「大宅氏」が語るのかといえば、「大宅氏」に「語り部」が多いとの指摘もあるが、ここは前述した「大宅氏」が「藤原（中臣）鎌足」と地理的に繋がるといふことを有意に利用したということになるのではなからうか。この場合、藤原氏の歴史を語る「大宅世次（世継）」という名告りは、聞き手を欺く偽称あるいは「藤原世次（世継）」の韜晦的呼称ということになるが、「歴史の優れた語り手」であることを大上段に振りかざした大宅世次（世継）が、随所に見せる「笑い」に透けて見える翁の老練・老獪さからすれば、これは「韜晦的呼称」ということになるが。ただ、「韜晦的呼称」とすると、何故そうしたのかとの疑念が残る。「藤原氏の歴史」を語るのであれば「藤原世次（世継）」とすれば単純明快であるが、あえて「第三者の眼」を借りる設定をしたのは、対読者意識、「大宅世次（世継）」の実体を「山科」を媒介として読者にその知識・想像力をもつ

て感得させる謎解きの感興を企図したのかもれないが、また別様にも考えられる。鎌足に始まり道長に至る「藤原氏の歴史・家系（九条流）」を中心に語るとき、語り手を「藤原世次（世継）」と設定すればその語りの行き着く先（方向）はどうなるのであろうか。この作品はいくつかの理由で「語りの現在時」を万寿二（一〇二五）年に設定しているが、執筆時は『栄花物語』正編成立（執筆）時より後であることが略認められている。『栄花物語』正編の成立を一〇三〇年前後（和田英松氏説・新潮社 日本文学講座）と想定したとき、この『大鏡』執筆時（六巻本の五巻まで）には、藤原氏九条家流の中心にあるのは道長の長男摂政関白左大臣頼通と内大臣・右大臣教通（共に源倫子系）である。

藤原氏とは直接的な氏族関係にない第三者「大宅世次（世継）」に藤原氏の歴史を語らせたのは、この「歴史語り」が藤原鎌足から道長を経て頼通・教通に直接的に繋がることを避けようとの思惑も働いているのであろうか。

五 第五巻後半「藤原氏の物語」

さて、予定通りに道長までの系譜を語り終わるうすときに、世次（世継）は一見唐突に次のように言う。

今の世となりては、一の人の、貞信公・小野の宮殿を放ち奉りて、十年とおはすること、近くは侍らねば、この入道殿もいかがと思ひ侍りしに、いとかかる運に押されて、御兄達はとりもあへず滅びたまひしにこそおはすめれ。

それもまたさるべく、あるやうある事を、皆、世はかかるなんめりとぞ人々おぼしめすとて、有様を少しまた申すべきなり。

世の中の帝、神代七代をばさるものにて神武天皇より始め奉りて、三七代に当たりたまふ孝徳天皇の御代よりこそは、さまざまの大臣定まりたまへなれ。但し、この御時、中臣の鎌子の連と申して、内大臣になり始めたまふ。その大臣は、常陸国にてむまれたまへりければ、三十九代に当たりたまへる帝、天智天皇と申す、その帝の

御時にぞ、この鎌足のおとどの御姓、藤原と改まりたまひたる。されば、世の中の藤氏の初めには、内大臣鎌足のおとどをし奉る。その末々より、多くの帝・后・大臣・公卿さまぐに成り出でたまへり。

（以下の内容は別紙の通り）

道長本人の伝を首尾粹取りする疫病の記事で締めくくるやいなや、世次（世継）の木に竹を接いだようなこの語り出し方は、「大臣」の列伝を語り始めた時点では棚上げした鎌足からの藤原氏の系譜を、大臣列伝（道長）の最後に辿るのが当初からの予定（構想）であったことは窺わせる。だが、鎌足についての世次（世継）の語りの終わりに「太政大臣になりたまはねど、藤氏の出で始めのやむごとなきによりて、亡せさせたまへる後の御いみ名、淡海公と申しけり」と閉めたのを耳敏く聞きつけた夏山重木（繁樹）に、「大職冠をば、いかでか淡海公と申さむ」と異議を唱えさせたのは、序文で世次（世継）の語りに対して「時々、さるべき事のさしいらへ、重木もうち覚え侍らむかし」に呼応させて、重木（繁樹）を語りの場に再登場（復帰）させて終幕の準備をとつたのであろう。だが、世次（世継）は帝紀の終わりで「流れを汲み

て、源を尋ねてこそはよく侍るべきを、大職冠より始め奉りて申すべけれど」と語っており、世次（世継）に事実誤認はなかった。ここで世次（世継）に鎌足と不比等を混同させるのは、重木（繁樹）再登場（復帰）のためとはいえ、この前後照応のズレは序文と巻五後半（藤氏物語）とが同一執筆者の筆使いとして見るにはいささか違和感なしとしない。

また、この巻五後半の記事は、道長本伝の計算された記事配列とは違って別紙の通りに雑多な記事が羅列的に並べられており、その前半部分は「藤原氏」の始祖鎌足関係記事が中心をなしているが、かなり行きつ戻りつの整理不十分な内容構成となっており誤りも多い。後半は道長の法成寺無量寿院関係の記事で、宗教者道長称賛の内容で終わるという「道長伝」全体の一部を構成する内容とはなっているものの、道長本人の為人を語る部分とはかなりの違和感があることは否めない。⁶

六 序文の「五時教」と『大鏡』の

構想・構成

第五巻は、別紙に見るように前半と後半との統一性に欠けた内容構成だが、この「二部構成」が当初からの構想であったのか否かを以下検討する。

『大鏡』の「序」には、全体の構想構成に関わる記述として次の記述がある。

まめやかに世次が申さむと思ふことは、こと事かは。

ただ今の入道殿下の御有様の、世にすぐれておはします事を、道俗男女のお前にて申さむと思ふが、いと事多くなりて、あまたの帝王・后、また、大臣・公卿の御上を続くべきなり。その中に幸ひ人におはしますこの御有様申さむと思ふほどに、世の中のことの隠れなく顯はれるべきなり。つてに承れば、法華經一部を説き奉らむとてこそ、まづ余經をば説きたまひけれ。それを名付けて五時教とは言ふにこそはあなれ。しかのごとくに、入道殿の御栄へを申さむと思ふほどに、余經の説かると言ひ

つべし。(傍線筆者)

また帝紀(後一条)末には次のごとくある。

世次はいと恐ろしき翁に侍り。真実の心おはせむ人は、などか恥づかしとおぼさざらむ。世の中を見知り、うかべ立てて持ちて侍る翁なり。目にも見、耳にも聞き集めて侍る万の事のなかに、ただ今の入道殿下の御有様、いにしへを聞き、今を見侍るに、二もなく三もなく、ならびなく、量りなくおはします。譬へば一乗の法の如し。

(「一乗の法」はここでは法華經と同義)

この両者は、道長「法華經」一乗の法と、道長が法華經を信奉した事実と重ねての記述であるが、『大鏡』全体を統括する「序」では「五時教」の語とつないで説明されている。この「五時教」は『大鏡』読解ではこれまでほとんど注目されることのなかった語句だが、実は『大鏡』全体の構想・構成、語り手「大宅世次(世継)」の名称に関わる重要語句かと思われる。

「五時教」とは仏教語で、辞書・解説類では、釈迦が一代五〇年間に説いた教法を、次の五期に分けて説明する言葉(中国天台宗の始祖智顗が説いたとされる)であるとされる。

第一時 華嚴時 第二時 鹿苑(阿含)時 第三時
 方等時 第四時 般若時 第五時 法華・涅槃時
 (「五時八教」『総合佛教大辞典』法蔵館・中村元『広説
 佛教語大辞典』東京書籍に拠る)

この語句は十一世紀頃の仮名文には見られない語句であり、『大鏡』作者(達)の知識レベルを想像させるが、ここでのこの語の使用はむしろその仏教的思想的内容に立ち入っての使用ではなく、「一時」から「五時」への展開という五段階の時間的な展開の形式を作品構成に利用しようというものである。

すなわち、この語句を序文に持ち込んだのは、『大鏡』第五巻は「五時教」の第五時法華経と涅槃経の二部構成に倣い、法華経(一乗の法)に重なる「道長伝」と涅槃経の形を借りた藤原氏始祖鎌足から始める「藤氏物語」の二部構成を当初から構想していたということの意味するのではなからうか。

平安時代に於いても一般的な構成原理として使われる「三部」構成ではなく「五部」構成にしたのは、藤原道長と法華経との強い繋がりを知る作者(達)がそのことを強く意識した、「五時教」に示される五部構成の形態・特徴を利用した

のであろう。

右のような理解が可能であれば、「大宅世次(世継)」の呼称に込められた語りの内容・範囲は、「五時教」に倣った五部構成を採用して、平安時代藤原北家の歴史を冬嗣から始め、中でも「三平(時平・仲平・忠平)」(基経伝末)から「三道(道隆・道兼・道長)」(兼家伝末)までを中心に据えて道長までの藤原北家の歴史を語り、最後に藤原氏全体の歴史に及ぶということになる。

「大宅世次(世継)」は、「世次はいと恐ろしき翁に侍り。眞実の心おはせむ人は、などか恥づかしとおぼさざらむ。世の中を見知り、うかべ立てて持ちて侍る翁なり」(大臣列伝序)と「藤原氏の歴史」についても全てを熟知していると自尊豪語る。この超高齢の老獺な翁の名は、おそらく実在の名称および「公」の意を持たせた呼称ではなく、藤原氏の始祖「中臣(藤原)鎌足(の私邸)」と「大宅氏」との地縁的繋がり(山科郷)から、「大宅氏」の氏名を借りた「藤原世次(世継)」の韜晦的呼称ということになるのではなからうか。つまり、この「大宅の世次(継)」という仮面の下に隠された「本名」は、「藤原世次(継)」ではなからうか。

注

- (1) 筆者はかつて「歴史物語」第三巻「大鏡」の「研究の動向」において、小島瓊札氏が「大鏡と大宅世継の性格」（國學院雑誌 昭38・1）で、藤原鎌足の子が宇治郡山科郷にあったことと「大宅氏」の本拠の一つがここにあったことの繋がりから、作者は「大宅世次」の「大宅」に世次（世継）の歴史語りの出発点の意を込めているのではないかと指摘していることに触れて、「その場合、「大宅世継」とは「藤原世継」の範疇ということになるが、「世継翁」作者の老練さからすればあるいはその辺りに真意があるのかもしれない」と記した。本稿はこのことを、その後検討した「五時教」等との関わりから具体的に検討したものである。
- (2) 「大鏡」が扱う時代の（大臣）には、少ないながらも源雅信・重信など「源氏」もいるが、「大鏡」では「源氏」を語りの対象にはしていない。
- (3) 倉野憲司「語部と古事記・風土記」「解釈と鑑賞」二九一 昭三十九年一月
- (4) この山科郷の「大宅氏」と「中臣（藤原）鎌足」の「陶原家」が不比等によって大和に移されて山階寺・興福寺となったことに触れて、小島瓊札氏が「大宅」には世次（世継）の「歴史語り」の出発点の意がこめられているのではないかと指摘している（注1論文）。小島氏論文発表当時は、「大鏡」の成立時期は院政期、作者には藤原氏と源氏の人物名が多く挙げられていた（日本古典文学全集「大鏡」解説に簡潔に整理されている）時期であり、このような研究状況が反映して穏やかな意味づけになったのであろうか。
- (5) 森下純昭「『大鏡』大宅世継の笑い」（中京国文学 第二四号 平成17年3月）
- (6) このいわゆる「藤氏物語」の部分は、特に前半部分に歴史的事実と異なる誤りが多く、道長本伝とは異なる執筆者が想定される。この部分には本文上の問題もある。世次（世継）の年齢を「年百歳に多く余り二百歳にたらぬほどにて」として、序文の「一九〇歳」に対応させているが、異本系本文にはこの部分がない。後の改修増補あるいは裏書きの混入などの考え方が示されている。松村博司『歴史物語考その他』右文書院 一九七九年、同『歴史物語研究余滴』和泉書院 一九八二年、加藤静子『「大鏡」東松本の本文の性格』巻五・六の検討から、「（『国文学論考』四二二二〇〇六年三月『王朝歴史物語の方法と享受』二〇一一年に所収）。
- (7) この部分は拙稿「『大鏡』の外的原形態」「五時教」を手懸かりとして、「（中京大学文学部紀要 第41巻 二〇〇六年三月）と一部内容が重複する。
- （別表 この内容一覽は、六巻本東松了泰本を底本とした新潮日本古典集成『大鏡』石川徹・新潮社の頭注小見出しを借りて作成した）
第五巻道長伝の内容構成 五時教の「第五時」法華経・涅槃経の二部構成」を採用
【前半】「五時教」の五番目「法華経」に重ねる）

・兼家の五男

・強運＝疫病の難を逃れる（兄道隆・道兼の病死）

・道隆長男伊周の幼さと比較

・北の方二人（北の政所倫子・高松殿の上明子）

共に多産十二人（子女に恵まれる）

・道長の和歌

・心魂のたけき人（大極殿の肝試し）

・道長の特異な人相

・道長のパフォーマンス（晴れの場での決定的印象をつくる）

・勝負運の強さ（伊周との競射）＝政治的対決の場での豪気

・伊周の幼さとの比較 姉詮子の後ろだて

・強運＝疫病の難を逃れる。「運」の文字（兄道隆・道兼の病死）

【後半】「藤原」氏の物語（「五時教」の五番目「涅槃経」部分に相当）

・藤原鎌足から道長までの系譜説明

・「藤原氏」の発生、鎌足の大臣

・不比等と藤原氏四家分流

・冬継の南円堂建立と道長の孫通房（頼通の長男）の誕生

・藤原氏の氏神の由来とその変遷

・氏寺、山階寺の事ども

・皇后の父、天皇の祖父となつた藤原氏の人々

・代々の人々の造寺（鎌足 多武峰・不比等 山科寺・基経 極楽寺・忠平 法性寺・師輔 楞嚴院）と道長の無量寿院

・兼家の宇治木幡参詣と道長浄妙寺建立の由来

・道長、無量寿院を法成寺と改め、その金堂供養の盛儀（治安二・一〇三二）年七月十四日（道長一家集合・人々の讃仰）

・道長女彰子入道し上東門院となる（万寿三・一〇二六年一月十九日）

・万寿二年（一〇二五）の天変（嬪子の懷妊・寛子の病悩）

・夏山繁樹、宝の君忠平の死の悲しみを想起（忠平の孫次々に帝となる）

・大宅世継、一品宮禎子内親が将来東三条院詮子や上東門院彰子のようにになるとの瑞夢を、その生母妍子に伝えたいと言う。

（禎子＝一〇三七年中宮、一〇四五年七月夫後朱雀天皇崩御・実子尊仁親王立太子に伴い出家。一〇六九年女院）聞き手（語り手・筆者）「ここにあり」と顔を出す。

（文学部教授）